

日本学士院賞 受賞者

安藤 宏

ひろし



専攻学科学目 日本近代文学

生年	昭和三十三年	五月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
略歴	昭和五七年	三月	東京大学大学院人文科学研究所博士課程中途退学
	同 六二年	三月	
	同 六二年	四月	東京大学文学部助手
	平成 二年	四月	上智大学文学部専任講師
	同 七年	四月	上智大学文学部助教授
	同 九年	四月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
	同 一九年	四月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
	同 二二年	四月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（令和六年三月まで）
	同 二四年	九月	博士（文学）（東京大学）
	令和 六年	四月	放送大学客員教授（現在に至る）

博士（文学）安藤 宏氏の『太宰治論』 に対する授賞審査要旨

「自意識過剰の饒舌体」とは、太宰治の小説の特徴的な文体として指摘されるところである。「弱さを演じ続ける太宰の饒舌は近代

小説の得がたい財産」として、こうした文体によって生み出された太宰作品の日本近代小説史への貢献を高く評価する安藤宏氏は、本書『太宰治論』（東京大学出版会、二〇二一年二月）において、太宰治の自意識とその表現の特異なあり方、すなわち「自己言及のドラマ」というものが、太宰治においていかにして形成され、変化していったのかということ、太宰治の約二〇年間の小説家としての活動を大きく四期に分け、それぞれの時期の代表作を取り上げて分析し、跡づけている。

「第Ⅰ部 揺籃期」では、太宰が高校を卒業して大学入学のため上京する昭和五年（一九三〇）二一歳頃までが対象とされている。地主・商家であった太宰の生家津島家が、明治になって津軽地方きっての大地主に成り上がっていった歴史と社会的な背景、そして

そうした一族の内部における太宰治の生育環境がまず明らかにされている。やがて少年太宰治は、大地主階級の「放蕩の血」というものを仮構して、「罪」の意識からそれを告発するという図式に沿って習作的な小説を津軽の同人誌に発表するようになる。しかし、これらの試みは失敗に終わり、その「罪」の意識は骨肉に対する「愛憎と不即不離の関係にある」ホロビのテーマへと昇華され、最終的には太宰晩年の代表作『斜陽』などにも繋がっていくことになったと論じている。

「第Ⅱ部 『晩年』の世界」では、心中事件を起こして自分だけが生き残り、その後も薬物中毒による入院や自殺未遂を起こしながら、小説家としての自立を図って第一小説集『晩年』を出版するに至る、昭和五年二歳から昭和十一年二七歳頃までの作品が分析されている。東京で大学生になった太宰が、芸者だった女性との結婚問題によって生家津島家から分家除籍を受けたことや、津軽時代から関わっていた左翼的な非合法活動からの離脱によって、自尊心の崩壊という危機に陥る。そうした太宰の「ひしがれた自尊心」が、ホロビのテーマと結びつくことによって「魚服記」や「道化の華」などという短篇が作られ、それらを収録する太宰の第一小説集『晩年』が昭和十一年六月に出版された。『晩年』という作品集では、「自意識過剰の饒舌体」によって文学的表象としての「死」が執拗に取

り上げられるとともに、みずからを故郷喪失者としてその悲哀が観念的に歌い上げられているが、そうした特徴は「同時代の最前線の文学的課題に棹さす」ものであり、太宰作品の先進性を見ることができるとして高く評価される。

「第三部 中期の作品世界」では、最初の妻との離婚を経た後に再婚し、生活の再建を期して作家活動に向き合い、初めは山梨県甲府市に、後に都下の三鷹に居を定めた、昭和十一年二七歳頃から昭和一六年三二歳頃までを取り上げる。この時期の太宰は「罪」の意識を作品の前面に押し出すようになるとともに、肉親や家庭と自身自身との間の「へだたり」を前提として自己を相対化し、そのうえで「語り」を通して最終的には自己の正当化を図ることが小説の方法になっていったことが、昭和一四年刊の『愛と美について』『女生徒』や昭和一六年刊の『東京八景』という作品集の分析によって明らかにされている。『女生徒』に収録される「富嶽百景」という作品中の「富士には月見草がよく似合ふ」という一文は、今も太宰の警句として名高いが、安藤氏はこの警句とこの時期の太宰の創作方法とを関連づけて、「太宰治の文学は、やはり〈富士〉と〈月見草〉の関係——へだたり——を前提に初めて成り立つものであったように思われる」と指摘する。

「第四部 戦中から戦後へ」では、日中戦争・太平洋戦争を経て

敗戦後に至る時期の太宰の戦争観や戦中体験が、作品にどのように反映しているかを、昭和一六年三二歳頃から、玉川上水で入水自殺する昭和二三年三九歳までの作品を対象として検討している。戦時下の「天皇制家族国家論」的な「運命共同体」イデオロギーのもとで、「皇室を中心とする家族国家」という一つの観念共同体」を、「みずからの位置を照らし出す座標軸」に設定するようになった太宰は、その座標軸に拠って家族という血縁共同体や故郷津軽と自己との関係を再構築していくことになった。そして、このテーマを、偉大な存在（天皇）と卑小な存在（私）、庇護する者（兄）と庇護される者（私）との間の位置関係を前提条件として意識される「へだたりのパトス」というものを基盤にした「語り」として表現したとし、昭和一九年一月に出版された『津軽』には、戦時下の小説家太宰のあり方が集大成されていると分析する。

しかし、太宰が依拠した「運命共同体」は敗戦によって崩壊し、太宰の戦中期の「語り」を支えていた「天皇」と「民である私」、「兄」と「弟である私」という「タテのヒエラルキー」が有効性を喪失してしまつたために、戦後期の太宰は新たに「都会」と「田舎」、「男」と「女」というような対立項を設定して、「ヨコのダイアログ」に活路を見出そうとしたが、それも失敗し、『ホロビ』を一人称で語る小説家へと転進した。その結果生み出されたのが、戦後期の太

宰の代表作とされる『斜陽』（昭和二二年）であり、自伝的な要素を多分に含む『人間失格』（昭和二三年）であったと跡づけられている。

本書は総論としての「序」と作品論を中心にした四三篇の論文、そして太宰作品の生成基盤や歴史的背景について、具体的には家族関係や友人関係、時代の文化や文学の動向、演劇・映画・絵画などの諸芸術との交渉、同時代の作家井伏鱒二や志賀直哉に対する抵抗や反発の意味、キリスト教の受容などさまざまな問題を幅広く、俯瞰的あるいは考証的に取り上げる四八篇の「コラム」からなる、総計一、二〇〇ページに及ぶ大作の論文集である。

これらの「論文」と「コラム」において、本書は従来の汗牛充棟ともいえる太宰研究の成果に周到な目配りをしつつ、太宰研究をさらに広い文化的・文学的な視野のもとで深化させた。なかでも本書の特筆すべき点は、主題や典拠との関係など作品内容に焦点を当てて巨細に論ずるだけでなく、太宰の作品がその「語り」によってどのように小説として構造化されているのか、太宰はどのような「語り」をなぜ必要としたのか、そしてその「語り」は作品世界に何をもたらし、小説家太宰自身をどこに導いていったのかということ、個別作品の分析を積み重ねて通時的に追求し、その変化を精緻に記述することによって、太宰作品の到達点と小説家太宰の宿命を

鮮やかに析出することに成功したところにある。

そして、それは太宰治という一人の特異な小説家の問題として閉鎖的に論じられるのではなく、「私」の表現はどのような文体・語りにおいて可能なかという、日本近代文学が抱えてきた大きなテーマの解明にも資する開かれた研究になっていることも、本書の優れた特徴として指摘しておくべきであろう。安藤氏の研究の中心に置かれている太宰研究の成果を基礎にしつつ、明治期の『浮雲』から戦後期の第三の新人まで広く日本の近代小説における表現のあり方を文学史として捉え直した『近代小説の表現機構』（岩波書店、二〇一二年）や、日本近代小説における「私」の語られ方とその文体の特色を概観した『私』をつくる近代小説の試み（岩波新書、二〇一五年）などが本書に先んじて出版されており、前者の『近代小説の表現機構』は第二一回やまなし文学賞と第三五回角川源義賞を受賞していることも付け加えておきたい。

以上のように、柔軟かつ精緻にして視野の広い本書の達成は日本近代文学研究の最先端を切り開くものになっており、日本学士院賞にふさわしい研究業績として高く評価できるものと考ええる。

主要業績

単著

1. 『自意識の昭和文学―現象としての「私」』、至文堂、一九九四年
2. 『太宰治 弱さを演じるということ』、ちくま新書、二〇〇二年
3. 『近代小説の表現機構』、岩波書店、二〇〇二年
4. 『日本近代小説史』、中公選書、二〇一五年、新装版二〇二〇年
5. 『私』をつくる 近代小説の試み』、岩波新書、二〇一五年
6. 『太宰治論』、東京大学出版会、二〇二一年

編著・共著

1. 『太宰治全作品研究事典』、神谷忠孝・安藤宏共編、勉誠社、一九九五
年
2. 『太宰治』、安藤宏編、若草書房、一九九八年
3. 『近代の日本文学』、野山嘉正・安藤宏共編、放送大学教育振興会、二
〇〇一年
4. 『日本の小説一〇二』、安藤宏編、新書館、二〇〇三年
5. 『展望 太宰治』、安藤宏編、ぎょうせい、二〇〇九年
6. 『読解講義 日本文学の表現機構』、高田祐彦・渡部泰明・安藤宏共著、
岩波書店、二〇一四年
7. 『ことばの危機 大学入試改革・教育政策を問う』、阿部公彦・沼野充
義・納富信留・大西克也・安藤宏共著、東京大学文学部広報委員会、
集英社新書、二〇二〇年
8. 『太宰治 単行本にたどる検閲の影』、斎藤理生・安藤宏共編著、秀明大
学出版会、二〇二〇年
9. 『近代「国文学」の誕生』全五巻、鈴木健一・高田祐彦・安藤宏共編、
岩波書店、二〇二二年
10. 『講義 日本文学』、東京大学文学部国文学研究室編、東京大学出版会、
二〇二一年

11. 『坂口安吾大事典』、大原祐治・十重田裕一・安藤宏共編、勉誠出版、
二〇二二年

論文（多数につき二〇〇〇年以後の主要論文を抜萃）

1. 『作中「小説家」の生成と展開―太宰治を中心として』、『国語と国文学』
七七巻五号、二〇〇〇年五月
2. 『太宰治における「減び」の力学―「斜陽」を中心に』、『解釈と鑑賞』
六六巻四号、二〇〇一年四月
3. 『検証・太宰治の昭和二十三年』、『国文学』四七巻一四号、二〇〇二年
一二月
4. 『交差する「自己」―「第一次戦後派」と「無頼派」と』、『文学』四巻
五号、二〇〇三年九月
5. 『「重霧の間」にあるもの―「舞姫」の構造』、『森鷗外研究』一〇号、二
〇〇四年九月
6. 『太宰治における「転向」の虚実―未定稿「カレッヂ・ユーモア」東京
帝国大学の巻』を視点として』、『日本近代文学館年誌資料探索』一号、
二〇〇五年九月
7. 『自意識と関係性―「第三の新人」における〈恥〉の形象』、『解釈と鑑
賞』七一巻二号、二〇〇六年二月
8. 『転換期の太宰治―未定稿「背徳の歌留多」から』、『懶惰の歌留多』へ』、
『東京大学国文学論集』一号、二〇〇六年五月
9. 『近代の小説機構―小説はいかにしてみずから「伝承」をよそおひ得る
か』、『文学』八巻一号、二〇〇七年一月
10. 『「カインの末裔」論』、『解釈と鑑賞』七二巻六号、二〇〇七年六月
11. 『近代小説における「言」と「文」』、『文学』八巻六号、二〇〇七年一
月
12. 『太宰治「愛と美について」論』、『東京大学国文学論集』三号、二〇〇
八年五月

- 13 「一人称の近代」、『文学』九卷五号、二〇〇八年九月
- 14 「太宰治と東京」、『東京大学国文学論集』四号、二〇〇九年三月
- 15 「もう一つの物語」としての肉筆資料―『人間失格』を例に、『文学』一一卷五号、二〇一〇年九月
- 16 「片岡鉄兵関連資料から見えてくるもの」、『日本近代文学館年誌資料探索』八号、二〇一三年三月
- 17 「道化の華」から見えてくる近代小説史、『日本文学論究』七三冊、二〇一四年三月
- 18 「近代日本文学」という制度の成立、『人文知3 境界と交流』（熊野純彦・佐藤健二編、東京大学出版会、二〇一四年三月）
- 19 「晩年」試論執筆順位を中心に、『太宰治研究』二四号、二〇一六年六月
- 20 「太宰治「女の決闘」論」、『日本文学研究ジャーナル』九号、二〇一九年三月
- 21 「太宰治『お伽草紙』の本文研究…新出原稿を中心に」、『日本近代文学館年誌…資料探索』、日本近代文学館編、二〇二〇年
- 22 「太宰治「斜陽」における、ホロビンの美学」、『東京大学国文学論集』一六号、二〇二〇年